

ポカンと建さんが訪ねて来た、建さんは横濱の金持の季つ子で御母さんの眼の中に入つても痛くない程可愛がられ甘やかされた僥倖せ者である、而して僕等が兄貴振れる唯一の人間である頓馬な我輩に兄事するのだから餘程馬鹿に相違ない、『建さん泊つて行け』『ウン』建さん初めつから宿つて行く氣である。

其夜建さんと僕はサイダーをさげて海岸へ行つた、所が大磯は何かの御祭りて海岸は素適な賑いだ、角力もある、神樂もある、而して見て居る奴等は例のハモニカの吹けそうな歌留多の取れさうな兵古帶やリボン連計りだ、未だ非人情を解せない建さんは大部其所に見て居たそうなのを無理に引張つて遙か距つた砂丘の麓へ踞つて海で冷した心算で未だ冷へない生温いサイダーをラツパ飲にしながら我輩大に兄貴振つて諄々と非人情を説いてやつた。

建さん初めは仲々得心が行かなかつたが漸く一夜の御説教ですつかり我宗旨で洗禮をされてしまつた。

『僕も其非人情と云ふのをやり度いな幸さん』建さんは無邪氣だ。もうすつかりやり度くなつて居る。『幸さん、非人情な旅行をしやうや、金はあるよ』

鬼ならぬ幸さんは此所に金棒を得たわけだ、勿論賛成した、明日行く事にした、行先は？——行先をさめるとつまらなくなるから只漠然と國府津まで汽車へ乗る事とする、後はほんとうに足の向く次第である、携帶品は僕は繪の道具一式、建さんには荷物が無いから僕等の雜囊を負はせる事にする、其中に此旅

のバイブルたる漱石の鶉籠一冊と、ビスケットをこて／＼入れた、ゆかた掛けて下駄ばき、頭には滅法大きな海水帽、時によりの髻ばしよりにでも洗足にでもなる心組だ、變手古な風體だらふが建さんが『一種面白いハイカラだれ』と云ふから呆れる、建さんはハイカラか忘れ難い男である。

非人情な旅の前の晩だけれど建さんも、幸さんも、さすが弱虫で、人情たつぷりな手紙を夫れ／＼故郷の姉さんや御母様に出した、『日夜山野を跋涉』等と威張るかと思へば『御母様、家から離れてるとほんとに淋しくつて……』なんて甘えて居る、未だ非人情第一年生だもの、是れから大變な旅行が初まる。

水貼ブロックの造り方

旅行の時に一々紙の水貼をするのは面倒なもので、終日寫生して疲れて居る時は殊更にイヤなものなり。さればとて普通のスケッチングブロックは、繪具を弾き、膨れ上りて描きニクし、此點に於て水貼ブロックは便なり、其法、まづ旅行前に入用だけの紙を用意し、畫板に普通の水貼をして、其乾きし上へ更に第二枚目を貼り、又其上へ第三枚目と言ふ風に順次重ねて貼る。何枚重ねて貼つても同じ理窟だ。繪を描き終つたら小刀で上の一枚を剥がすので、此時注意しないと下の分まで剥がすことがある。ワットマンを一度水に浸すとよく風をひくが、此法を用ふれば中の方の分は空氣に觸れないから其心配が要らない、